

# 中国の“長い暑い夏”

## 各地に大字報の洪水

「批林批孔」運動が続くなかで、北京発

ロイター電（六月十八日）が、中国はこの夏、「政治的な『長い暑い夏』を迎えることになりそうだ」との中国高官筋の感想を伝えてから一ヵ月余り過ぎた。六月十三日以来、北京をはじめ各地に現れた大字報（壁新聞）については、一時下火になりそうだと観測もあったが、七月中旬以降、再び各地に大字報の洪水が再現して話題を投げかけている。

### 革命委に批判の焦点

一方、「人民日報」や「紅旗」を中心とする「批林批孔」運動についての論説はさらに多様に進展し、春秋末期に「孔子を痛罵した柳下跖」（唐暁文）が革命的指導者としてたたえられる半面、孔子はついに「盗丘」だとされるに至り、林彪は「現代中国の極悪非道の盗丘」だとされるに至っ

た。

そのような折しも、去る五月以来、健康上の理由から職務軽減措置を党中央政治局会議によって決定されたと伝えられた周恩来総理の「入院重病説」「心臓発作説」が流されて外部世界の注目を集めている。

こうして中国の内政が再び注目されているのだが、さまざまな要求や欲求不満が入り混じった今回の大字報による批判のなかで目立つことは、まず第一に、文化大革命の正統性を問ひかけ、いわば「文革精神はどこへ行ったのか」と問う傾向が顕著であることである。この点は、最近の中国の諸論調のなかに文化大革命の偉大な精神とそれへの再評価を強調したものが多く、これも関連しているように思われる。

第二には、批判の焦点が、党委員会ではなく、革命委員会に向けられていることである。それは、主に革命委員会に席を占

めた、復権した旧幹部への批判、革命委員会幹部の「批林批孔」運動に対する「弾圧」への糾弾、革命委員会の「三結合」の形骸化への批判（とくに「革命大衆」が排除されたことへの批判）、革命委員会幹部の特権化への批判などとなって現れている。

一連の大字報によって名指しの批判を受けた者も、革命委員会関係者が多い。華国鋒・湖南省革命委员会主任代理、楊大易・同副主任、程世清・広西省革命委员会主任、賈江・北京市革命委副主任、汪家道・黒竜江省革命委员会主任、劉光濤・同第一副主任、陳康・雲南省革命委副主任、韓賡夫・武漢市革命委副主任、李端三・陝西省革命委员会主任、陳勵耘・浙江省革命委第一副主任、等々である。

### 党の一元化指導を強調

もとより、これら革命委幹部の多くは、同時に党委員会の職務を兼ねている場合が多いが、しかし最近の潮流が明らかに脱文革化傾向への批判を示していること、去る七月一日の「人民日報」社説「党はすべての指導するものである」と中国共産党の一元化

⑧

五三周年記念社説が、各級党委員会は、「運動を指導する主導権を握らなければならぬ」と強調して党の一元化指導を再三強調していることだからすれば、このようない連の革命委員会批判が意味するものは何か、を聞きわめる必要があろう。

文化大革命によって新たに成立した行政機関としての革命委員会への批判が目立つということは、各級革命委員会の上部機関である最高行政機関としての國務院に対する批判を意味するのかもしれない、さらにはその最高責任者としての周恩来総理への批判が含蓄されていると見なすこともできなくはない。

文化大革命同様「毛主席が自ら発動し、指導している」という今回の「批林批孔」運動においては、かつての文化革命小組と同様の中核指導組織「批林批孔弁公室」がすでに設置され、江青夫人が主任に、張春橋、姚文元両氏が副主任に、王洪文氏が顧問に就任しているとの情報（「ニューズウィーク」誌五月六日号もすでにこの情報を伝えている）もあるが、このような情報に加えて一連の「批林批孔」運動に関する論

説には周恩来批判を思わせるものが多いこと、明らかに健康上の問題があるとはいえず周総理の活躍が最近著しく低下していること、などを考え合わせると、事態はかなり流動的な方向に向かう可能性もあるように思われる。

國務院にもしも問題が存在するとすれば昨夏の中国共産党十全大会でその近い開催が再度予告された全国人民代表大会は、なお当面開催できないようにも思われる。だとすると、中国は一九六四年末以来約一〇年間にわたって、行政機関の制度的・組織的空白が続くことになる。

三年ぶりの建党記念社説

ところで、さる七月一日の建党記念日には、三年ぶりに先の『人民日報』社説が発表されて注目された。林彪異変の余波であるろうが、中国共産党は一九七一年の建党五〇周年に『人民日報』『紅旗』『解放軍報』の三紙誌共同社説を発表して以来、建党記念日にも社説を出さなかつたのである。それが今回は『人民日報』の単独社説として発表されたのであるが、この社説は党の一

元化指導 （手書き）  
強調したきわめて短いものであり、そのトーンもどこか弱くて、ある種の「迷い」も感じさせずにはおかないものであった。 （手書き）

さる六月十八日付『人民日報』社説「闘争のなかで理論隊列を育成しよう」は、最近の中国で強調されている課題の一つである「理論隊列」の強化に関連したものであったが、この社説にはマルクス主義の強調のみがあつて、問題の性質上、当然予想される言葉である「毛沢東思想」という用語が全く出ていなかった。同じ「理論隊列」の強化を論じた『紅旗』第六号の短評「マルクス主義の理論隊列を強化しよう」に比べて、きわめて対照的であつたといえよう。このことがどのような意味をもつのか、建党記念日の社説が単独社説であつたことの一つの理由を示唆するものであるのかどうか、いまだ速断はできない。

ともあれ、最近の中国内政状況はきわめて複雑で曲折の多いものであるだけに、われわれは当面「長い暑い夏」に着目しつづけねばならないだろう。

（東京大学助教授 中嶋誠雄）